

イソプロチオラン粒剤 フジワン粒剤	取扱メーカー： 協友アグリ、日農、一農 原体メーカー： 日農
成分： イソプロチオラン（ジチオラン系 PRTR・1種）………12.0%	性状： 類白色細粒 毒性： 普通物 消除法： ——

【品目特性】 ……………

●土壌種の影響を受け難く、穂いもちに対し安定した効果が持続するとともに、稲こうじ病を同時防除できる。

●水稻の育苗箱処理により根の伸長及び発根を促進し健苗育成ができるとともに、ムレ苗防止効果がある。

●低温、日照不足や高温等の不良環境下では稔実しにくいもみの登熟を高める登熟歩合向上効果がある。また、高温登熟下における白未熟粒の発生軽減効果もあり、高品質米の生産に貢献する。

●有効成分の特性は参考資料の「有効成分特性一覧表」を参照。

【使用上のポイント】 ……………

●極端な漏水田での使用はさける。

●所定量を均一に処理する。

〈本田で使用する場合〉

●散布に当っては、田水深を3cm以上の湛水状態とし、散布後少なくとも3～4日間は湛水状態を保ち、散布後7日間は落水、かけ流しはしない。

●いもち病に対して予防的に散布した場合に有効であり、葉いもち防除の使用適期は初発の7～10日前である。発生子察情報に注意して時期を失しないように早目に散布する。穂いもち防除の使用適期は出穂20日前（葉いもちの発病程度、気象条件などにより出穂10～30日前）である。なお、本剤の使用に当っては使用時期を誤らないように病害虫防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

●いもち病を主体に小粒菌核病との同時防除に使用できるが、多発時の小粒菌核病（小黒菌核病）には効果が不十分なことがあるので注意する。

●小粒菌核病に対しては時期を失しないようにな

るべく早目に散布する。

〈育苗箱で使用する場合〉

●苗の上から均一に散粒し、直ちに上から灌水して粒を崩す。なお、最初の灌水で粒を崩壊させないとその後の乾燥により粒が硬化して崩れ難くなるので注意する。

●いもち病に対して使用する場合は、移植後およそ6週間を経過すると葉いもちに対する防除効果が弱まるので、移植後葉いもち発生までの期間を考慮して使用する。なお、天候不順等で葉いもちの発生期間が長びく場合、又は葉いもちの発生が遅れた場合には必要に応じて本田でいもち防除剤を追加散布する。

●いもち病に対しては、苗の緑化期から移植直前まで使用できるが、箱内の苗いもちも併せて予防するためには、緑化期から硬化初期に散粒する。但し、その場合本田で安定した葉いもち防除効果を得るためには1箱当たり75gを処理することが望ましい。

〈ムレ苗防止に使用する場合〉

●育苗中の低温による根の吸水低下や高温による蒸散増加など、吸水と蒸散の不均衡によって起こるムレ苗（生理的な急性萎凋障害）に対して有効であるので、このようなムレ苗の発生する地域で使用する。

●苗立枯病には効果がないので、育苗に際して苗立枯病が発生するおそれがある場合は、それらに有効な薬剤との体系処理をする。

●は種前又は苗の緑化始期にいずれか1回処理する。

〈トビイロウンカ防除に使用する場合〉

●いもち病防除を主体にトビイロウンカとの同時防除に使用することが望ましい。その場合はいもち病とトビイロウンカに対する使用適期が一致する時に使用する。

●トビイロウンカに対する増殖抑制効果は1回処理では不十分であるので、育苗箱施用時又は第2回成虫飛来期に第1回処理を行い第2世代老令幼虫～第3世代若令幼虫期に第2回処理を行う。第1回処理時期である第2回成虫飛来期は通常6月下旬～7月上旬頃であり葉いもちに対する使用適期とほぼ一致する。第2回処理時期である第2世代老令幼虫～第3世代若令幼虫期は通常7月末～8月15日頃であり、穂いもちに対する使用適期とほぼ一致する。

●ウンカ類の飛来時期や発生消長がずれた年や多発生の年には効果が不十分になる場合があるので、このような時には発生状況に応じてウンカ類の防除剤を組み合わせる防除を行う。

●トビイロウンカに対する効果は殺虫作用によるものではなく、主として増殖抑制作用によるものである。極めて遅効的で散布後密度抑制効果が現れるまでに2週間以上を要するため、本剤はあくまでも予防的に使用し、多発時の防除剤としては使用しない。なお、これらの処理によりセジロウンカに対してはある程度の効果が期待できる場合もあるが、ヒメトビウンカに対しては全く効果が期待できないので注意する。

●ウンカ類の飛来時期や発生消長は年によって異なるので発生予察情報に注意し使用時期を決める。特に初めて使用する場合には病虫害防除所等関係機関の指導を受けることが望ましい。

〈果樹の白紋羽病防除に使用する場合〉

●樹幹部周辺の土壌を木の大きさに応じて掘りあげて根を露出させ病患部を削り取る。さらに腐敗部を取り除いて薬剤を罹病根部に適量塗りつけた後、残りの薬剤を掘りあげた土壌に混和しながら埋め戻す。

●重症樹に対しては、所定範囲内の多めの薬量を処理し、結果させないよう配慮する。

●苗木に対しては、移植時に高薬量を処理すると薬害を生じる場合があるので、移植1年以降に処理する。

〈野その食害忌避に使用する場合〉

●樹冠下半径約50cmの範囲の落葉などをあらかじめ取り除いてから処理する。

●忌避剤以外の物理的な防除方法など他の防除法と併用して使用するのが望ましい。

【薬効・薬害等の注意】……………

〈稲の登熟歩合向上を目的として使用する場合〉

●低温等生育不良条件下及び高温登熟条件下で効果的であるので、これらの条件下で使用する事が望ましい。

〈稲の高温登熟下における白未熟粒の発生軽減を目的として使用する場合〉

●高温登熟条件下で効果的であるので、この条件下で使用する。

【安全対策上の注意】……………

●眼に対して刺激性がある。

●作業時に着用していた衣服等は他のものとは分けて洗濯する。

●カブレやすい体質の人は取扱いに十分注意する。

●散布後は河川、養殖池等に流入しないよう水管理に注意する。

●魚類に影響を及ぼすので、使用时並びに使用後は注意。



【適用と使用方法】

作物名	適用病害虫名 又は使用目的	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	イソプロチオランを含む 農薬の総使用回数
稲	いもち病	育苗箱（30×60×3cm, 使用土壌約5ℓ） 1箱当り50～75g	苗の緑化期から移植直前まで	1回	本剤の所定量を育苗箱中の苗の上から均一に散粒する	3回以内 （移植前は1回以内、本田では2回以内）
		3～5kg／10a	葉いもちに対しては初発7～10日前 穂いもちに対しては出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで	2回以内	湛水散布	
	小粒菌核病	4～5kg／10a	出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで	育苗箱：1回 本田：2回以内	〔育苗箱〕 本剤の所定量を育苗箱中の苗の上から均一に散粒する 〔本田〕 湛水散布	
	稲こうじ病	3～4kg／10a	出穂10～30日前 但し、収穫30日前まで			
	トビイロウンカ	育苗箱（30×60×3cm, 使用土壌約5ℓ） 1箱当り75gと本田4～5kg/10aの体系処理	〈育苗箱〉苗の緑化期～移植直前まで 〈本田〉第2世代老令幼虫～第3世代若令幼虫期 但し、収穫30日前まで	育苗箱：1回 本田：2回以内	〔育苗箱〕 本剤の所定量を育苗箱中の苗の上から均一に散粒する 〔本田〕 湛水散布	
		本田1回目3～5kg/10aと本田2回目4～5kg/10aの体系処理	〈1回目〉第2回成虫飛来期 〈2回目〉第2世代老令幼虫～第3世代若令幼虫期 但し、収穫30日前まで			
	ムレ苗防止	育苗箱（30×60×3cm, 使用土壌約5ℓ） 1箱当り15g	は種前	1回	本剤の所定量を所要量の育苗箱用の床土に均一に混和する	
		育苗箱（30×60×3cm, 使用土壌約5ℓ） 1箱当り25～50g	苗の緑化始期		本剤の所定量を育苗箱中の苗の上から均一に散粒する	
	根の伸長及び発根促進	育苗箱（30×60×3cm, 使用土壌約5ℓ） 1箱当り25～50g	苗の緑化始期	2回以内	湛水散布	
	登熟歩合向上 高温登熟下における白未熟粒の発生軽減	4kg／10a	出穂10～20日前 但し、収穫30日前まで			
なりしりんご	白紋羽病	3～5kg／樹	落花直後まで	1回	土壌混和	2回以内
うめ			収穫60日前まで			
ぶどう		3kg／樹	萌芽期まで			1回
もも		開花前 発芽前				

作物名	適用病害虫名 又は使用目的	使用量	使用時期	本剤の 使用回数	使用方法	イソプロチオランを含む農業の総使用回数
りんご おうとう	野ソの食害忌避	200 g／樹	根雪前	2回以内	本剤の所定量を樹冠下半径約50cmの範囲の土壌と均一に混和する	2回以内